

## 29. 高気圧酸素療法による脳梗塞急性期の治療

大山秀樹\*<sup>1)</sup> 新妻 博\*<sup>1)</sup> 木村栄男\*<sup>2)</sup>  
村田清仁\*<sup>2)</sup> 近野歩実\*<sup>2)</sup>

〔\*<sup>1)</sup>仙台病院脳神経外科  
\*<sup>2)</sup>同 高気圧酸素治療部〕

脳梗塞急性期の治療は現在のところ薬物療法が主体である。我々の施設では開院以来脳血管障害に対して積極的に高気圧酸素治療を行っており、今回は特に脳梗塞急性期に対して有力な治療手段となりうるのではないかと考え報告する。

平成3年11月より平成6年4月までに行った救急治療としての高気圧酸素療法は延べ2916回(529件)であり、大部分が脳血管障害症例である。これらのうち外科的治療を行ったり、なんらかの原因で中止した症例や、しびれやめまい及び失語症等の軽症例をのぞいた脳梗塞症例は194例である。年齢は37歳から88歳、平均69.1歳であり、男124例、女70例であった。平均入院日数は60日であった。

症例の病型分類では脳血栓症164例、脳塞栓症18例、その他12例と血栓症の割合が85%とかなり高率になっているが、塞栓症の症例のうち50%が血栓溶解療法を受けていることと、TIA症例が除外されていることによると思われる。

194例の退院時の転帰では、日常生活に復帰したものは55%、軽い麻痺を残したが独歩自宅退院したものの26%、介助及び寝たきりとなったものの14%、死亡4%であった。リハビリをする必要がなく自宅退院できたものが実に81%と従来の報告に比べ高率であった。

高気圧酸素療法は脳血栓症に対して特に有効であった。

## 30. クモ膜下出血後の症候性脳血管攣縮に対する高気圧酸素治療の効果

合志清隆 上村秀彦 今田育秀  
(産業医科大学病院高気圧治療部)

【目的】クモ膜下出血後に頻発し高い死亡率を示す症候性脳血管攣縮の治療には、一般的に hypertensive hypervolemia が広く行われている。我々は、これまで症候性脳血管攣縮に対して高気圧酸素(HBO)治療を併用し、この治療法の有効性について報告してきた。その後症例数が増加したので、今回その治療結果について述べる。

【対象と方法】この11年間にクモ膜下出血で急性期手術を行った131例を対象とした。症候性脳血管攣縮の診断は、術後症状が再度悪化する特徴的な症状によって行った。経過中の頭部CTを全例で撮影し、診断後は hypertensive hypervolemia を全例に行い、症例によっては HBO 治療(2.5 ATA, O<sub>2</sub> 60min)を1-2回/日の割合で併用した。HBO治療の評価は、治療中の神経症状の改善度、脳波変化と一ヶ月後の神経学的転帰で行った。

【結果】症候性脳血管攣縮は50例に認められ、このうち28例に HBO 治療の併用を行った。HBO治療前に脳梗塞がない症例では、HBO治療に反応することが多く脳波も改善した。また、最終的に脳梗塞に陥る頻度も低く、hypertensive hypervolemia 単独治療群に比べて神経障害を残すことが少なかった。しかし、すでに脳梗塞を合併している症例では、HBO治療の効果が認められる頻度は低かった。また、脳血管攣縮の予防目的で、早期に HBO 治療を開始した症例では、症状が出ないか出ても軽症であった。

【結論】①症候性脳血管攣縮には、hypertensive hypervolemia と HBO 治療の併用療法が有効であると考えられた。②クモ膜下出血の術後早期からの HBO 治療は、脳血管攣縮の予防につながることを示唆された。